



TITLE:

<雜錄> 契丹誦詩

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <雜錄> 契丹誦詩. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 169-169

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138823>

RIGHT:

契丹誦詩

夷堅丙志卷十八を見ると、契丹誦詩といふ題で次のやうなことがのつてゐる。

契丹の小兒が初め書を學ぶ時には先づ俗語を用ひその文句を顛倒させて讀む。それで漢字なら一字ですむものが二字にも三字にもなることがある。自分(洪邁)が金國に使したとき、その接伴副使祕書少監の王楠といふものが、いつも笑ひ話にそれを聞かせて呉れた。例へば、烏宿池中樹、僧敲月下門といふ兩句の詩は、「月明裏和尚門子打。水底裏樹上老鴉坐」といふ風に讀むので、すべて、この類である。といつて教へて呉れた。この王楠は實は錦州の人で契丹出身なのである。

すると、當時の契丹人は、大抵一應は支那の俗語に通じてゐた。それで漢文を讀むにも我が國と同じやうな返り讀みをしながら、契丹語を使はないで支那の俗語を使つたわけだ。これは日本と全く異なる點である。しかし漢詩の誦法に至つては、近頃大流行の詩吟を思ひ起させておかしくならない。もちろん、これとても我が國では嚴然として日本語を用ひてゐるが、契丹の場合はさうでなく支那の俗語であつた。これがやはり日本のえらい所であらう。(日比野)